B 132　学生服に関する実態調査

都立立川短大　○三井紀子　酒井豊子

目的　学生服は、多くの人がその育ちざかりの重要な時期に着用する衣服であるが、社会的、経済的、教育的、衛生的などの観点から、多くの考慮すべき問題をもっていると思われる。そこで今年度は、学生服の採用実態と、学校ないし教師側の意見などを調べることとした。

方法　東京都内の全中学校および高等学校の、家庭科または生活指導担当の教員を対象に、質問紙によるアンケート調査を行った。

結果　全学校数1250校のうち、有効回答数は545校（44％）であった。制服または標準服を指定している学校は、中学校95％、高等学校88％であった。制服の形は、女子では1位ブレザー、2位セーラー服で、男子では1位詰めえり、2位ブレザーである。これらは各校の制服採用年代と密接な関係があり、古い学校では、女子ではセーラー服、男子では詰めえりの割合が大きい。また公立校より私立校にセーラー服、詰めえりが多い。

服地の繊維組成は、冬期では毛100％が多く、特に女子の私立校では圧倒的に多い。夏期では、毛・ポリエステル混紡が多くなる。

学生服についての教員の意見は、現在制服を指定している学校では、制服はあった方がよいとする割合が大きく、無指定校では、制服はない方がよいとする割合が大きい。しかし、制服指定校で、制服がない方がよいとする割合より、制服無指定校で、制服がある方がよいとする割合の方がずっと大きく、制服に何らかの教育的効果を期待する教員が多かった。